慈光

昭和二十八年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

（通第四十八号）

第五卷・第三號

目次

ひかりといのちを賜る……花田正夫（2）
大無量壽経講話……福島政雄（7）
善を好む悪人……三瓶德英（11）

佛陀の大悲切々として火宅に満つ

柱ゆがみ塀くずれたる古き家に、諸の毒虫悪魔すみ、たがひに餓にかられていがみ合ひぬ。
忽ちにして火はこの家を包み、焔一時に拡りて、棟は崩れ梁はさけ、毒虫悪鬼は、火の中にいがみ狂ふ。
長者の子等この家にあり、遊びたはむれて、父のおしへを聞かず、父は方便(ヒダテ)して子等のために、羊、鹿、牛車の、門外に待てりと語る。
子等は車のことを聞くや、競うて火の宅を出で、もろもろの難をはなる。
この時長者は、大いなる白き牛にひかせて、宝にて飾れる車を、等しく子等に與へぬ。
子等は此宝車に乘り、こころのままに四方に遊び、たのしみきはみなかりき。
舍利弗よ、我も亦かくの如く、あらゆる聖者の中の最尊にして世の父なり。すべての衆生は、皆我が子なり。
彼等は深く世のたのしみに執着し、智慧の眼とぢて、その危険をさとらざれど、三界は安きところなく、さながら火宅の如し。
苦しみはそこに満ちて、おそろしさたとへんにものなし。老と病と死の苦せまり、あらゆる煩悩の火、燃え燃えてやまず。
佛(ワレ)　三界の火宅を離れ、寂かなる林の中にあり。今三界はみな我が有なり、その中の衆生は、みなわが子なり。
佛(ワレ)　ねんごろに、教へさとせども、深く世慾に迷うて、耳に入らず、さとるに由なし。
佛(ワレ)　ここに三つの乘(ノリモノ)を説いて、衆生をして、世の苦相を知らしめ、世を出ずる道を演べたり。
今や、衆生の心さだまりたれば、へだてなき　一佛乘を説く。汝等、このこころをさとらば、すべて皆、佛の道を得ん。

ひかりといのちを賜る

花田正夫

小説「小島の春」で世間に広く照会せられ、更に薄倖の詩人、明石海人氏によつて一般に知らされた、岡山の愛生園に眞宗同朋会があります。Kさんは開園以來その会の世話を續けて来られた人であります。今はすでに老齢になられ手足も不自由な上に失明せられて、やすらかに念佛申されて居る由であります。

Kさんの念佛生活に大きな縁を絡ばれたのが名古屋に居られます本多惠孝先生であります。或日本多先生を訪ねました時、Kさんの思出話をされました。先生は東京の全生園で数十年教誨師を続けられた方で、現在は御自坊を中心に法燈を掲げて居られます。先生のお話によりますと、

「Kさんが東京の全生園で療養中に餘病が併発して殆んど危険といふ狀態になつた。どうした縁か私を非常に信頼してくれ、枕頭に見舞ふと、唯一人の妹のことが苦になりますと云つて二三の遺言までをした。そこで種々と奔走して、せめて生命のあるうちにそれを片付けて、病人に安心して貰ひたいと努力したら、一応始末がついたので、それを報告すると本人は非常に善び、其後不思議にもめきめきと恢復した。そして或日基督教には洗礼といふものがあるが佛教にはないのかと尋ねられたので、帰敬の式といふ弟子入りの式があると答へると、自分もそれが受けたいと眞面目に申し出たので、その前に佛法をよく聞いて呉れ、そしてほんとうに納得出來たら、どんな式でもしようと言ふと、非常に熱心に佛法を聞いてくれて、遂に念佛も申すやうになつた。そこで自分も非常に有難く思うて、一部屋を暗くしローソクを灯して嚴粛な氣持で、お互に涙と涙のうちに式を終つた。ところが他の患者の人が珍しがつて隙間からこの模様をのぞき見をしてゐたが、何か非常に心うたれたと見えて、八人も一緒に、帰敬式の申出があつた。そこでそんな形式はあとでよい、しつかり話を聞いてくれと言ふと、皆で聞法してくれるやうになり、念佛の声が園内にもれるやうになつた。」とのことであります。

其後岡山に愛生園が開園せられることになり、当時全生園長であつた光田先生が新園長として転任せられる時、Kさんも光田先生に伴はれて愛生園に移られたのでした。

◎

私は二十餘年前に、岡山医大の慰問班にまじつて園に参りました。その時光田先生からも種々なお話を承りました。特

に力をこめて説かれたことは「この病は遺伝ではない。伝染である。それなのに一般の人々は遺伝とのみいまだに思ひ込んでゐる、このために沢山の悲劇が演ぜられてゐる。このことをどうか強く世間に訴へてほしい。更に病患の人は早く入園して貰ふやうに勤めて欲しい。」とのことでありました。御生涯を救癩に捧げられて居る園長のおだやかなお顔も深く印象せられました。

其時私は一時間餘り信仰の話を致しました。それが終りますと、同朋会の幹事の方二三人に案内せられて、園内を廻りましたが、私の心に深く刻まれたことは、同朋会の方々が、或は花壇を作つて園内を飾り、或は重患の人々に植木や切花で慰問せられ、更に皆の人々が非常にきらつて草の茂つてゐた火葬場を美しく作り、そこへの道が出來上つたばかりのときに、見せて貰つたことでした。

其時Kさんもその幹事の方々の中に居られたことと思ひます。どうして念佛するやうになりましたかと、おたづねした時、近角先生とその関係の方から承りましたと答へられたと記憶して居ります。

◎

噫、星霜夢の如く流れ去つて二十餘年、Kさんも老いられたことであらうと思ひますが、不思議な御縁から再びKさんと信交をあたため得られるやうになりました。

それは数年前に入園された、まだお若いAさんと、Tさんが、昨年頃からKさんについて聞法せられてゐるうちに、深く念佛をよろこばれるやうになり、AさんとTさんから私の方に書信がとどけられ「私達は念佛に心ひらかれて、有難い生活をさせて頂いてゐるが、親兄弟ともこの喜びを頒ち合ひたいから慈光誌を親元へ送つてくれるやうに」とのことでありました。私はそれを読んで、何といふ有難いことか、何といふ嬉しいことか、また何といふ尊いことかと、念佛もろともに思はず叫ばずには居られなかつたのであります。

その嬉しさを記念して、近角先生の「人生と信仰」と、清沢満之先生の「我が信念」を送りましたところ、お三人から次の様な法信を頂きました。もとよりTさんの代筆であります。

◎

南無阿彌陀佛。　　Kより。

突然Tさん宛に書籍が配達されました。作業から帰つたTさんは、直ちにA君を呼び、私にも本の名を聞かせて下さいました。三人は喜びの餘り「我が信念」を読みました。この書は光田園長が全生園の頃（大正二、三年）沢山入手せられて盛に患者間に読ませて下さつたもので、当時を思ひ出して懐しい本であります。又「人生と信仰」は「懺悔錄」と共に求めて盛に読んだものであります。

近角先生は、日暮里に癩患者が沢山集つて居りましたが、夜になると先生の求道会館に參り、常観先生と常音先生とに御法話を聞かせて頂いたとのことであります。草津の眞宗の寺院も先生の御因縁で建立されたとのことであります。今草

津の園に居りますH君も聽聞者の一人であつたさうであります。又近角先生が留学中クリスマスの盛大なのを見られて、日本で花祭を提唱せられ、それから日本各地で盛大に行はれ始めたと聞いて居ります。私には、実にうれしく懐しく、近角先生が眼前に現れて下さるやうであります。是非先生も帰国されるやうな時には來園して下さい。三人で心からお待ちして居ります。

◎

A、より。

春とは名ばかりで餘寒のきびしいことであります。中略。私達同朋会の者は、お念佛に慰められ、励まされて日々の療養生活を明るい氣持で続けさせて頂いて居ります。御送本して頂きました「我が信念」をTさんに読んで聞かせて頂き有難いことでありました。

なほ信諦門と俗諦門を聞かせて頂き、不自由な盲目者の私ではありますが、私に出來ますことで何かさせて頂くべきことがあることに氣づかせて頂くと同時に、俗諦門が如來様の一人働きであることをいよいよ深く、はつきりと味はせて頂きました。この書を故郷に送りまして父母様にも聞いて貰ひたいと思つて居ります。

◎

南無阿彌陀佛。　　T、より。

極寒にたへてさすがに梅花がほころび初めて參りました。私事、お陰様にも日々の生活の上に御念佛を唯一の心の糧として生かされて、こんな嬉しいことはありません。

「我が信念」を読ませて頂き、沈み勝ちな私の心に強く身にしんで味はされ、人間に生れました幸福を一層深く感じ、今後の療養生活に大きな光明を頂きました。

言葉や文字ではつきり云へませんが、心の底からうなづける眞宗の教、御念佛の中に生かされて居る私は大変うれしう御座います。私はこの病になつて初めて人間に生れた幸ひを感じさせられました。

◎

私はお三人のこの法信を読ませて頂きまして、強く深く胸打たれることであります。お一人お一人がここまで辿りつかれるまでに、如何ばかりの御苦労をせられたことか、思ふだに胸がつまされて了ひます。「小島の春」にも誌されてありますが、光田園長が、新入園の方が、船で小島に着かれると何時も、御自分に涙を浮べられながら患者の一人一人を迎へられてゐるとか。生涯を救癩の道に捧げつくされる光田先生の涙には、一人一人の長い病苦の遍歴がまざまざと写り、同悲同憂の無限の感慨がこもつてゐることでせう。それにつけましても、或は絶望の淵にたたずみ、或は涙の谷、死の絶壁を越えられて、幸にもここに生命あつて、佛陀無限の慈懐に悲引せられ、あふれ出る念佛無碍のひかりに、無明の闇が破られ、諸の禍が転ぜられて行くところ、佛陀は涙を一杯たたへられて、即我善親友、わがよき親しき友が帰つたぞと、よろこび迎へて下さることでありませう。

◎

これと同時に、お三人の念佛ひとつにやすらぎよろこばれてゐる御姿に接して、私自身に、この上もなく有難く尊く輝いて思ひ浮びますのが、聖德太子の常持語「世間虛仮、唯佛是眞」の金句と、そのおこころを身に徹してお信証下された親鸞聖人の、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界、よろづのことみなもつて、そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておはします」の実語であります。

私共は何か生き甲斐をひとつ見出さないと生きて行けない人間であります。それで一生懸命にそれを見出さうと血眼になつて探し求めて居ります。然しその生き甲斐といふものは破れや崩れぬ不滅のものでなければ何時も不安と動揺を繰り返さねばなりません。絶対に眞実なるもの、これが私共の求める究極なものであります。然し私自身がすでに相対虛仮の身でありますから、進むも退くも、右するも左するも、真実の影さへ見出すことが出來ないのであります。さうでありますから、生きて生き甲斐なく、死して死に甲斐のない、醉生夢死の落漠たる人生を徒らに悲しみ空しく歎く外ありません。この一点の光もない、天に哭し地に慟じても如何ともすることの出來ない身にこそ、佛陀の大悲は火と燃えて、南無阿彌陀佛と名告り出て下さるのであります。そらごとにたわごとにまことあることなき身に、南無阿彌陀佛の德光ひとつが、無障無碍、清淨真実のひかりを放つて、虛仮なる人生の全体、生も死も、煩惱も罪濁も、貫ぬきとかして無限の荘厳を頂くのであります。

◎

噫、然しこんなことを書いて居ります私自身が難治の大病人であります。煩惱の膿血にまみれた始末のつかない重病者であります。

聖人は涅槃経を引用されて「世に三人あり、其の病治し難し。一には謗法、二には五逆、三には断善根なり。かくの如きの三病、世の中に極重なり、三乘の人の能く治する所に非ず。譬へば病有りて必ず死して治すること無からんに、若し瞻病隨意の医薬有らんが如し。若しこの妙薬無くんば、かくの如きの病定んで治す可からず。当に知るべし、是の人必ず死せんこと疑はず、この三種の人、またまたかくの如し」と示されて「是を以て、今大聖の眞説によるに、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓をたのみ、利他の信海に帰すればこれを矜哀して治し、これを憐愍して療したまふ。喩へば醍醐の妙薬の一切の病を療するが如し」と佛德を讃じ、佛力を歎じて居られます。

私如き難治難化、必死をさだめとした重病人こそ、阿闍世と全く同一であります。然るに佛陀は「阿闍世の為に涅槃に入らず」とお誓ひ下さるのであります。煩惱熾盛の五逆の罪人、父を殺し、母を幽閉した、大逆の阿闍世を救ひ遂げなければ涅槃に入ることが出來ないと仰せ下さるのであります。この佛陀の悲心が、大煩悶の底に沈む阿闍世の心底に徹して「我れ無根の信を獲たり」とひらけたのであります。「無根

といふのは今迄かつて佛を尊み佛を拜むといふ心の無い自分の心で、そのあさましさは悪臭人を狂はす伊蘭樹と同じであつた。その伊蘭樹の林に今不思議にも佛を信じ佛を拜する心がきざした。それは根の無いところから栴檀香木がめばえたと同様である。この香木の力で悪臭が転じて芳香となつた。何といふ尊いことか、また何といふ有難いことか。若しこの信力によつて我国の人々が救はれ得るのであれば、自分はそのためどんな長い重い苦労を続けても悔いるところはない」と阿闍世自身が懺悔し、且つは隨喜して居ります。

伊蘭の林の四十里四方の密林に、栴檀香木の芽が一度きざすと、その悪臭が転じて芳香がただよふとは佛典によく譬へられることでありますが、これこそ煩惱罪濁の身、自ら損じ他をも損じ、自ら害し彼れも害し、彼此倶に害し合うて行く外にない私に賜はる念佛の御德香であります。

ここに生きて生き甲斐もなく、死んで死に甲斐もない逆謗の死骸の身に、かぎりのない、いのちと、さゆるもののないひかりを賜はるのであります。病苦療養の中にあつて、Kさんはすでにその白道を長年歩み続けられて自他共に救はれ行く不思議さを体験せられ、Aさんは失明の不自由さの中にも自分で出來る報恩の道を見出され、Tさんはまた人間に生れたことの喜びを深く感じられて居られる。これこそ愛生園に咲く栴檀の芳香であり、この德光は地にひろくとこしなへに輝きわたることでありませう。私共も亦お掲げ下さる法燈のひかりに、我が身の重病のほどを深く省みさせて頂き、無窮の願力と無碍の大悲を仰ぎ、念佛の中に永劫の手をとり合ひつつ、生ける日をつくして共々に人間に生れたよろこびと、真実の御教にあひまつる有難さを味はせて頂くことであります。

病みこやす身にしあれども　念佛の
華咲く園よ　とほときろがも

大無量壽經講話

福島政雄

大経の会座に集られた菩薩方の德を讃仰せられた経文について申し上げます。その御德の始めに「皆普賢大士の德に遵ひ」とありますが、この普賢菩薩とは、佛陀の智慧でありま

がら限りなく佛の徳を求め求めて無限の求道を続けて行くのであります。

かくて「諸々の菩薩の無量の行願を具し」とありますやうに、大経の会座に集つた菩薩達は、一切の菩薩の種種の行と願とを具へて、何処までも道を求めて行く菩薩であります。

次に世に所謂「釈迦の八相」即ち釈尊がお生れになつてから、おかくれになるまでの道行きを讃歎されて居ります。

釈尊はお生れになると共に、七歩あゆまれるのでありますが、七歩とは、迷ひの世界、即ち六道の世界を一歩ぬけてゐられるのであります。そしてお生れになつた時、天も地も共にこれをよろこぶ、光は遍く十方に照り、無量の佛土は六種に震動すとあります。六種に震動すとは、つまり動く姿、鳴る音で、これは世界が震へよろこびおどる心地を表現されたものであります。

段段に成長して行かれると種種な学問を習はれるばかりでなしに「後園に遊びて武を講じ芸を試む」とありますやうに武芸も上達せられるのであります。釈尊と云ふ方は仲仲体力の上でも絶倫であつたと思ひます。弱弱しい感傷的の人間ではなく、充分な体駆と体力を具へられて居り、武力も充分な力を持たれた方であります。それだけの健康を持たれながら人生に深く思ひをひそめて行かれましたことは、遠く常人の及ばぬ所であります。

私共は病気をしたり、不如意の時などは「人生とは如何」と愚痴をこぼしますが、これは弱音の声であります。体力はあり、宮殿に美しい女がお仕へし、沢山の御馳走を見ながらも、これを踏み抜けねばならぬと出られる所に、釈尊の偉大さを感ずるのであります。

仙台の第二高等学校に私が勤めて居ました頃、一人の英語の先生がありました。その先生は時時大宗教家や世界の偉人をよく茶化して話されました。「釈迦は一番得をした、三千の宮女をものにして後に道を得たが、キリストは一番損をした」かういふことを言つて居られても、御自分では萬巻の書を読み、基督教、佛教、漢籍などきはめられました。穏やかな、懐しい人でありました。後に阿刀田校長が「キリスト教信者とか佛教信者といふ人は一癖あつて仲仲他を容れないところがあるが、あの先生は実におだやかである。あれでゐて所謂宗教の信者でもないのに、先生の記念に中宮寺の観音様を二高の校庭に建てられた時は非常に喜ばれました」と話されました。宮殿の中に美女や御馳走が沢山ある中で、人生の苦を発見し、無常を感じて行く、そこに釈尊の偉大さがあります。この英語の先生は、このことをよく知りながら茶化して話されてゐました。

次に「老・病・死を見て、世の非常を悟り」とありますが、これは私共では五十歳に近くなつた頃から、老病死の苦しみが少々解り始めるのでありまして、二十歳頃はちつとも解りませんでした。釈尊は二十歳足らずでこれを感じて居られます。然も体力や武力の優れた健全な身体でありながら、老病死を見て、世の非常を悟るといふことは、私共の全く及びも

つかぬことであります。

次に「国と財とを位とを棄て山に入りて道を学す」とありますが、私が戦時中に新京で建国大学の青年に話しました時、青年達はどうしてもここを承認しないのであります。我々は国のために働いてゐるのに、釈尊は国を棄てて山に入られたといふことはもつての外であると云ふのであります。戦時中の当時としては尤ものことでありませう。然し静かに日本の歴史を顧みますと、代々の天皇方は御苦しい生活をせられたのであります。ことに藤原氏以來権臣とか閥族が、天皇や皇族を笠にきて、我欲や私欲をほしいままにして來たのであります。丁度今度の大戦に際してとつた軍の首脳部の行動と同様でありました。それを考へますと日本の天子に生れられましたのは過去の宿善でありながらも、非常に不如意の中に、尠くとも千年以上の間、泣くにも泣かれぬといふお苦しい立場で御位にあられた方が多いのであります。さうでありますから、歴代の天皇で佛法に帰依された方が多いやうであります。佛法の味から申せばさうであらうと想像出來るのであります。天皇の御位にありながら御心がとばらぬ、その問題の解決を佛道に求められたといふことは自然でありませう。昭和の初めから大戦の間もさうでありました。天皇陛下と申すと起立不動の姿をし最敬礼をいたしましたが、陛下を大切にしては居なかつたのであります。ところが最近陛下が各地を巡廻なされますと、萬民が慶びお迎へ申して居ります。陛下も如何ばかりお喜びのことかと察せられるのでありますが、今迄は陛下と萬民との中間の者がさまたげて居たのであります。最近におきましてもさうでありましたので、その昔千年以上の間、さうした狀態が続いた中に、天子の御位にあらせられた御心中は、実に淋しいあぢきないと思はれ、そこに佛法に深く帰依なされる原因があつた。むしろ私共から申せばおいたはしいと感ずるのであります。斯うした心持で読みますと、国と財と位とを棄て、山に入つて道を学ばれるといふ釈尊の御心もわかるのであります。

次に釈尊は出家の姿で六年苦行せられましたが、苦行ではいかぬと知られて、身を淨め、元気を恢復されて、菩提樹下に端座せられて「覚るまで動かじ」と、なられるのであります。釈尊はとかく冷灰枯木のやうに思ふ人が多いのでありますが、これは間違ひであります。釈尊ほど人情の深かつた方はなく、そのために非常に苦しまれた。こんな方は古今に稀れであると祖山先生に教へられました。

菩提樹下に端座された釈尊の前に種々の悪魔、優しく奇麗な姿となり、或はあさましいおそろしい姿となつて悪魔が現はれて居ります。これは釈尊が如何に数多い、強い煩悩を持つて居られたかがうかがはれますす。煩悩の強烈な者が、それを踏み越えるといふことは、非常にむつかしいことであります。

釈尊は煩悩の強烈な方でありました。さうでありますから端座された釈尊に種々雑多な悪魔がすさまじい勢で攻め寄せてくる。そこに降魔成道の姿がありますが、私にはこれが非

常に懐かしいのであります。私も煩悩熾盛でありますが、人生を夢みてゐる弱い面を持つて居りますが、釈尊は強烈な煩悩を持たれながら、これを統制される、打ち勝つて抜け出られるのでありますから、内面の強い争ひであります。そこには悪魔の大軍が攻め寄せて参ります。お父さん、お母さん、育てられた義母、ヤスダラ妃、御子ラゴラ、などの肉親、夫婦や親子の問題が強く迫つて参るのでありますが、そこを抜け出られて、しづかなさとりがひらけて参るのであります。そこを経典では「大光明を奮ひ魔をしてこれを知らしむ。魔眷属を率ゐて来り逼試す。制するに智力を以てし皆降伏せしむ」と言はれてゐます。制するに智力を以てし、皆降伏せしむとありますが、この智慧の力とは、内面的に自分を照しとほす力であります。つまり煩悩の隅から隅まで照しとぼされたのでありまして、自分の全煩悩の姿が、釈尊の前に現れて見えるやうになつたことであります。この煩悩の詳細な姿がこの経の下巻の五悪段、悲化段に説かれてあります。

次に「微妙の法を得て最正覚を感ず」とありますが、覚るとは、全煩悩の姿が隅々まで照し出されて来たことで、自分の中に、十の世界、下は地獄・餓鬼・畜生から修羅・人間・天上の世界、更に声聞・縁覚・菩薩・佛の世界の種々の姿が釈尊のいのちの内容に見えて来たのであります。これが最正覚のさとりの出容であります。

かやうに自分の姿全体が見えて参りまして、始めて心が寂かに落着いてしみじみとした慶びを感ぜられるのでありますが、そのしみじみとした慶びのままにこの世を去りたい心に一寸なられるのであります。この慶びを人に伝へることはとても出来さうにないから、このままこの世を去りたいと云ふ風な心が、一時佛の心に浮ぶのであります。このことは法華経に説かれてあります。かやうにこのままでこの世を去つて了はうかと云ふ心になられた時、今度は反対の心がおこるのであります。「釈梵祈勧して転法輪を請ず」とありますのがそれであります。帝釈天や梵天が転法輪をお願ひするのであります。転法輪といふ言葉は非常な力強さを示す言葉であります。大きな車をおして行きますと、大磐石も砕ける、釈尊の御力で、世間の如何なる問題も必ず砕けて解かれて行く、かうした意味があるのであります。

次に「佛吼をもて吼す、法鼓をたたき、法羸を吹き、法剣を執り、法幢を建て、法雷を震ひ、法電を曜かし、法雨を澍ぎ、法施を演べ、常に法音を以て諸々の世間を覚らしむ」とあります。実に勇ましい姿であります。獅子が吼えると一切の獸が默つて了ふやうに、佛が法を宣べられると一切の異学異見の者が声をひそめて了ふのであります。次に「法鼓を叩き」とありますと、名人が打つ太鼓は、そばに座つて聽いてゐる人にはやかましく感ぜられないが、遠方から聽くと力強くひびいて来る、これが名人の太鼓ださうであります。佛教の傳はり方にはかうした趣があるやうに思はれます。近くで聽くと仲々やかましく響くが、遠くまでとどかぬと云ふ風な宗教もあ

ります。釈尊の教は末世になる程、太鼓が力強く響いて来るのであります。更に「法羸を吹き、法幢を建て、法雷を震ひ法電を曜かし」とありますが、実に朗らかに、勇ましい姿であります。又いなづまの如く世を震はし、世を照すのであります。

更に「法の雨をそそぐ」とありますが、法の雨をそそいで地が潤ふのであります。法華経の薬草喩品に、雨のそそぐところに、地上の草木は、大きいものは大きく、小さいものは小さいなりに、夫々の天分を発揮して行くと説かれてゐますが、法雨をそそぐとは、かうした心持をもつのであります。佛陀のみ教の雨がそそがれると、我々の與へられた天分を発揮するやうに育てられるのであります。教によりましては、さうはいかぬものがあります。我々のもつ天分をも打つて叩いて砕き、或る型にはめようとする教もあります。キリスト教も多少その趣がありますが、ユダヤ教も確かにさうであります。マホメット教にもこの趣があります。佛教は夫々その分に應じて十分に発展させ発揮せしめるものであります。甲・乙・丙・丁と夫々そのままの天分が現れて行くのが佛法であります。この佛法が世界に伝はらぬ限り世界の平和は望めません。佛法の教を身にいただく者は、アメリカ、ソ連、独逸等々世界の国々にこれが伝はるために生きてゐるのでありまして、それ以外には生きてゐる意味はないのであります。

さういふ心持でこれを読みますと非常に励まされるのであります。その音は低く聞えても、遠くまでひびいて行きますキリスト教は高い音に聞えるが、遠くとどく力が足りないやうに感じます。その根本をも養ふのが佛法であります。キリスト教の養分が足らなくなる時、佛法が養分を足さねばならぬと思ひます。

ここで私はこの経の心持を味ふことであります。大経の会座に集られた菩薩方の徳は今讃仰申して居るのでありますがこれらの徳といふものは、説き手であらせられる釈尊の徳が聽き手の徳として現れてゐるのでありまして、説聽一如であります。そして私共もその片隅に座をしめてゐるのであります。そして私共に、静かな勇ましさで、法の雨を降らせ、諸々の世間をさまさせよと励まして下さるのであります。この諸々の菩薩と同じであると仰せられるのであります。この菩薩の徳を讃歎された経典を読んでも、甲斐がないのであります。

善を好む悪人

三瓶德英

或時、私は歎異抄の第三條と第十三條とを拝読して居りました時、フト頭の中に、善を好む悪人といふ事を思ひ浮べました。善を好む善人は自力作善の人で、善を好む悪人は他力をたのみたてまつる悪人と言へさうな氣がしたのであります。

人間はよい者を好みよい事を望む心ばかりで一生を終るやうにも思はれます。よりよく生きたい、衣服もよいものを着たい、食物もよいものを食べたい、住居もよい家、よい場所で暮したい、運もよく、健康もよく、経済もよく、と総てをよき様に、よき様にと、ありつたけの智慧をしぼつて生きて行かうとします。

また我々は幼少の時から、悪い事をすれば叱られ、善いことをすれば賞められる環境の中に生長し、教を聞くといふ場合は、何時でも、よい事をせねばならぬ、悪い事をしてはいけない、思うてもいけない。言うてもいけない、そして、善人になれ、賢い正直な人になれと、一切の教が、善を教へるから、一切の人が善を好み、よい事をしよう、善い工合にやらうと考へ、悪といふ事は、言葉を聞いただけでもいやな氣持になります。「性は善なり」といふ古人の訓は此辺から出來たのでありますまいか。

扨てこの様に、よいことをしたい、善い人になりたいと願つてゐるのでありますが、ここで非常に大切なことは、現在やつてゐる善なるもの、また將來の善を予想して其種子を播いてゐるが、果してそれが清淨であり、真実なものでありませうか。そこをしつかり省みなければなりません。若し清淨でないならば自らを汚し他をも穢し、腐つたもので、害にこそなれ利にはなりません。又真実のものでないならば、いつはりであり虚仮であり、不実であつて、誤間かしであり毒の雑つたものであります。

世間でよく反省と云ふことを大切にいたしますが、私共は自分の顔を自分の眼で見ることが出來ないやうに、身びいきの強いもので何時も自分を立派に思うて、徹底した反省は不可能であります。茲に教の鏡によつて自分を照らし出す外はありません。

茲に親鸞教に於ける善悪の問題を考へて見ますと、直に脳裏に浮ぶのが歎異抄の第三條であります。「善人でも救はれるから、悪人は間違ひなく救はれる」とか「他力をたのんで悪人が悪人であつたと知らされた者が、本願にかなふ者である」等の御言葉であります。この條につきましては信仰の深

い学問の勝れた方々が、哲学、倫理、心理、社会学などの種々の方面から親切丁寧に、徹底的解釈の著書を世に送り出して下さつてあります事は誠に有難いことであります。

ここに「他力をたのんで悪人が悪人と知らされる」といふ「悪人」といふ味ひについて申し上げませう。これは自分が自分を省みて悪人と思ふといふ風なことではないのであります。佛陀の御眼に映じた凡夫の我々の有様であります。大無量寿経の悲化段、五悪段にその有様を詳しく説かれてあります。その一端を申し述べますれば「心常に悪をおもひ、口常に悪を言ひ、身常に悪を行ひ、曾て一善なし。この様な人は親の恩を思はず、師匠や友人への義礼もなく、因果を信せず愚痴蒙昧でありながら自分では立派な智慧者である様に思ひ込んで居る。それを憐みいつくしんで、ねんごろに教へさとしても心の戸を閉めて受け容れぬ故、苦しみ迷うてやまぬのが如何にも可愛相である」と説かれてあります。

又「常に盗心をいだく、常に邪悪をおもふ、常に憍慢をいだく」等、あらゆる悪を具備した凡愚人なることを説き聞かされますとき、余りにひどすぎるお言葉の様でありますが、親鸞聖人からよくよく聞かせて頂けば、もつともつとひどい悪人なる私であることが、ちらりちらり解るのであります。「曾て一善なし、盗心・邪悪・憍慢」何といふ恐ろしい罪悪の私でありませう。貪欲のやまぬ、ほしいをしいの心は盗心の素質であり、愚痴我慢の心が邪悪を行ひ、憍慢は瞋恚の本であるとお聖教に訓へられてあります。

さてこの「曾て一善なし」といふことについて思ひ出すことがあります。昭和十一年の秋のことでありました。私の知人で八人の男子を育て、それぞれ相当の学業を終へ実業に就かせ、第八男を分家させました。その家移りの晩に、私も招かれ、家固めのお経を読んで御法話をしてくれとの事で、阿彌陀経と彌陀経和讃五首を読んでお話をしました。御存じのやうに御和讃に「萬行の諸善きらひつつ、名号不思議の信心を、ひとしくひとへにすすめしむ」とありますが、それにつきまして、「萬行の小善」と「執持名号の大善」等について感想を述べ、小善しか出來ない我々であるけれども、善と思へば余り自己の損害にならぬ限りやつて見たく、又やらずに居れないこともあるが、其結果は必ずしもよい事ばかりでなく、時には善い事をやつた為に腹を立てたり、人をにくみ恨む様なこともある。御一代聞書に「よき事をしたがるがわろきことあり」とあるが、よき事をしてもわれよきことをしたり、とわれといふ慢心あれば悪結果となる等の話を終り、次に家移りの祝宴となりました。

ところが私と隣り合つて座られた一老人が後刻私に語られるには「今晩のお話は私の事を言はれた気がして慚愧に堪えぬ。私は永い間小学校長をして居る中、或年卒業生に上級学校への入学希望を申出させた時、ずつと卒業まで首席で通した生徒が何も申出ぬ。そこで喚んで其訳を聞いて見ると、父なる大工さんが、上級学校に進めてやりたいが学費がないから大工の弟子入せよと云はれたと聞いて、私は誠に可愛相な

と思ひ、又この秀才の芽を析るのが惜しく、其生徒も上級学校を切望してゐる事を知り、師範学校に受験せぬか、入学出來たら学資は貸してやると云ふと、生徒は泣いて喜び、私も其家に行き親の了解を得て受験させ好成績で入学し、そこでも首席で卒業し、今度は高等師範に入り優秀な成績で卒業して、立派な中等教員となり、借金は二年位の間に元金だけを返しましたが、親が一度も礼に來ず、途中で会つても知らぬ顔で通り過ぎる。本人も借金を返して後は何年たつても顔を見せません。この事を思ひ出すとまことに腹が立つて仕方がありません。あれで自分は立派な教育者のつもりで居る。御恩知らず奴が、と内心怨恨の苦を何時も感じて居りましたが今の御話でよくわかりました。善と思うてやつた事が眞実の善でなかつた、悪の変形であつた、浅間しいことでした、全く私が悪人でした」と、非常に慚愧せられたことがありました。

斯様に佛陀や聖人のみ教によりまして、成程自分には眞実はない悪人であつたと知らされて來るのでありますが、これについて、個人個人の自覚の上に於きまして、「善を好み善を作す善人」と「善を好み善を作す悪人」といふ二類を考へて見たいのであります。

「善を好み善を作す善人」とは所謂修養道徳の世界に住む人の自覚であります。道徳的に善を作して自ら善人と思ふ事は当然であり、又善人とまではなくても、悪人であるとは思へないのが普通でありませう。

次に「善を好み善をなす悪人」とは佛の智慧に照らされておこる自覚であります。今信仰上から考へて見ますと、社会の一員として、道徳的に生きて行かねばならぬ私が、よいと思ふことはいたしますが、よくよく考へて見れば、それは善といふ程のものではない、当然せねばならぬ事をするか、或は世間からよく見て貰ふ爲の偽善でしかないけれども、やらずに居れないのであります。そこに想ひ到りますと、聖人の仰せられました通り「さればよきことも悪しきことも業報にさしまかせて」參るより外に途がないのであります。そこに仮令善を作すとも、今日今時の私は「穢悪汚染にして清淨の心なく、虚仮詔偽にして真実の心なし」で、さればこそ如來の清淨真実を以て、不可思議な至徳の尊号、南無阿彌陀佛を廻施して救済して下さるとの聖人の御声が我身に聞える気がいたします。

他力をたのみ奉つて悪人が悪人としれるといふことは、悪人たる事を自覚せしめられた念佛者でありませう。

全体悪人は何処へ行つても相手にされないのが当然でありますから、大慈大悲、広大無辺の真実なる彌陀佛は、おのづから悪人の処に來臨し給ふのであります。然もこの悪人は善くなる方法の絶無の悪人、たとへば治癒の見込のない重病の子供であります。その故に、阿彌陀佛のみ親の胸中やるせなく、立ちながら直ちにとつて、絶対善の境界、重病快癒の大医王室へ連れ込んで下さるのであります。「ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」とはこの哀々切々たる悲心で

あります。然もそのお目当は、「地獄は一定すみ家ぞの者、煩悩具足の凡夫「生死をはなるることあるべからざる悪人」であります。この悲心に催されて、「念佛申さんと思ひ立つ心」となり「善もほしからず、悪もおそれなき心」、さればよきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとへに大悲大願をたのみ、慚愧と感謝の安樂境を行かせていただくばかりであります。

以上の様に申上げますと如何にも立派に聞えますが、私はこの絶対界の念佛を申しながら、又しても欠してもよい事をのぞむ相対界の泥濘に落ちこんでは引き上げられ引きあげられて居る私であります。それにつけましても、近角先生が御晩年非常に愛唱せられました御歌

跡戻り、跡戻りして辿るかな
甲斐なきことに心まどひて

を身に泌みて有難く頂くことであります。

（昭和二七年、御正忌の所感）

普賢菩薩の偈文

圓なる智慧の日は、煩悩の闇をほろぼし
普く一切の法を照して衆生を安らけ給ふ。
総ての衆生のために、永劫の苦行を重ね
諸の世に随ひ給へどその心にけがれなし。
如來の尊を仰げば、普く十方に満てども
人はその罪に障へられて近けども見奉らず。
如來一つ御声にて説き給へば衆生は機に應じて悟る
かく智と行は異れども、解脱に差別はあらじ。
佛の身は世にたぐひなし、有に非ず無に非ず、
そは依る所なくして、去らずして徧く至る。
この法を聞きて歓び、信ずる心まことなれば
速に証りを得て、諸の如來に等しからん。

編集後記

春光やうやく地を潤ほして、草も木も若芽がたくましく、美しく萌えて居ります。慈光誌も四十八号を御送り出来、満四年の歩みを顧みさせられます。当時敗戦後の混乱から信仰書の出版は途絶え、到る所に、それを求められる声を聞いても、お答へする書もなく、せめて私の心に深く感銘を被つた書物から抜き出し、その求めに応じさせて頂き度いものと思ひ発刊いたしました。

今日では芝蘭黄菊と、種々の宗教書も出版され、さう云ふ方面の枯渇はよく潤されて参りました。又月刊の信仰雑誌も、夫々に発行されて居ります。この点では発刊当時の願ひはすでに終りました。ところが三年前から心臓筋肉障害となり、出歩くことが出来なくなりました私にとりましては、ペンを以つて皆様方とお会ひ申す外に途がなくなり、この雑誌が私の目となり、足となり、口となつて、私を生かして貰ふことになりました。有り難いことであります。

篤信家の加藤さんが「不思議ですなあ、あなたが出張が難しくなつた時、雑誌がちやんと掴えて居り、草庵も惠まれて法縁も与えられますことは、仏様の不思議な、御はからいです」と御訪ね下さると常に語られますが、全くその通りで、如来聖人の御用であります

然し、私自身は煩悩罪濁の身でありまして この罪業の中に、「めぐみたびたる御名の尊さ」ひとつを皆様と共に仰ぎ仰ぎ、生ける日をつくさせて頂き度いと念じて居ります。

無慚無愧　まことなき身に　み仏の
みぐみてたびし　御名の尊さ

◇

▽「大経講話」は福島先生の霊山会上の席にあつての御讃仰であります。阿難も未だ黙し仏陀は大寂定に入つてゐられる。そこに集る聖衆の中、今回は菩薩の徳を御述べ下さつて居ります。そしてその徳は世尊と全く同一のものであるとして説かれてありますことは「一切衆生を残らず仏たらしめん」との切なる大慈悲心が映えて、説聴一如と輝いて居ります。わが身に被る仏心の深さ広さを新しく教えられました。先生の御住所は横須賀市船越三八番地であります。

▽「善きを好む温人」とは歎異抄の三章を身読されて思ひつかれた信仰余瀝であります。数年前奥様を失はれ、独り起居される静かな三瓶老師の信味が深く浸み出て、心の闇を照してくださることであります。老師は島根縣邇摩郡井田村であります。

▽「ひかりといのちを賜る」の原稿は長島愛生園の同朋会の方々の法信に感激して一気柯勢に誌しました。厳冬風雪に堪えて、梅花ほころび始めるところ、春いまだしの荒涼たる庭に清香ただよふに似て、火宅無常の世界、煩悩具足の凡夫として、よろずそらごとたわごとまことあることなき身に、弥陀廻向の大悲の御名ひとつに、ひかりといのちを賜る、そしてわれならぬ清香を惠まれることであります。そこに「萬事念仏ひとつでことたりる」の破闇満願の微笑がほころびるのであります。

聚樂生

昭和二十八年三月十日　印刷
昭和二十八年三月十五日　発行
毎月一回十五日発行
定価　一部　金十七円（郵税共）
半年金百円（郵税共）
一年分　金二百円（郵税共）

名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　富田潤

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千草印刷所

名古屋市南区駅上町二ノ二八
一道会館
発行所　慈光社
振替口座番号　名古屋一〇四七〇番